シネマトゥデイ 編集

山形国際ドキュメンタリー映画祭 30年の軌跡

取材・文　中山治美

シネマトゥデイ 編集　www.cinematoday.jp

山形国際ドキュメンタリー映画祭 30年の軌跡

取材・文　中山治美

1 スターも来ない、地味な記録映画の祭典が三〇年も続いたワケ …… 02
2 未完で上映、非難を浴びた映画が数々の賞を受賞するまで …… 07
3 トラブル多発だった映画祭ゲストと宿泊宿が共に成長 …… 13
4 表現の自由と闘い続ける映画祭 …… 19
5 アジアにドキュメンタリー映画が生まれにくいワケ …… 26
6 映画祭の夜の社交場・香味庵クラブ …… 33
7 東日本大震災後を追い続ける映像作家たち …… 38
8 中学生約三〇〇人が映画で世界の苦悩を知る
…内戦後のボスニア描く『約束の地で』を鑑賞 …… 44

［懐かしアルバム］ ……

河瀬直美監督 …… 06
田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督 …… 32
アレクサンドル・ソクーロフ監督 …… 12
アッバス・キアロスタミ監督 …… 37
フレデリック・ワイズマン監督 …… 18
濱口竜介監督 …… 43
クシシュトフ・キエシロフスキー監督 …… 25
映画評論家・蓮實重彦氏
楊徳昌（エドワード・ヤン）監督
アピチャッポン・ウィーラセタクン監督 …… 51
ペドロ・コスタ監督

スターも来ない、地味な記録映画の祭典が三〇年も続いたワケ

1

アジア初の国際ドキュメンタリー映画祭として誕生した山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）が三〇年を迎える。「ヤマガタで会いましょう」を合言葉に、隔年開催して二〇一九年で第十六回（十月十日～十七日）。東北の地方都市に世界中から多彩な作品と人が集えば、笑いもあれば、波乱も起こる。むしろ、何が起こるかわからないから映画祭は面白い！　ヤマガタを熱くさせた数々の〝事件〟と共に三〇年を八回にわたって振り返ります。

一過性ではない、市制一〇〇周年の記念事業を目指して

ＹＩＤＦＦは平成元年の一九八九年に産声をあげた。山形市の市制一〇〇周年の記念事業の一つだ。今でこそ映画産業が地方振興の起爆剤になるとして行政が主導となってフィルムコミッションができるなど、人々の映画への理解はだいぶ深まってきた。東京都あきる野市が市制十五周年記念に『五日市物語』（二〇一一）、同二〇周年記念に『あきる野物語　空色の旅人』（二〇一五）を製作し、大阪府茨木市が同七〇周年を記念して前田敦子&高良健吾主演『葬式の名人』（樋口尚文監督。二〇一九年八月十六日に茨木市先行公開。同年九月二十日より全国公開）を大々的に発表するなど、記念事業として映画製作に着手する例も増えてきた。

第1回の開会式の様子。会場は今もメイン会場として使用されている中央公民館。

しかし頻繁な人事異動も余儀なく行われる行政において、恒久的事業を英断するのは稀。まして当時は記録映画とか文化映画と称され一般的に地味な印象のあるドキュメンタリーにフォーカスし、スターの来場予定のない映画祭、しかも国際映画祭をいきなりぶち上げるとは、改めて画期的な試みであったことがうかがえる。

そのカギを握るのが、当時、ＦＭ山形社長で山形市芸術文化協会専務理事を務めていた田中哲さんの存在だ。田中さんは山形市が発足し、市議会議員や市民の代表者からなる「記念事業計画策定市民委員会」のメンバーの一人だった。市民から募集して決まったメインテーマは「好きだから、さらに未来へ、やまがた一〇〇年」。しかし市側から提案された記念行事案は祭りや市民運動会、仮装行列など一過性のものばかり。これに異議を唱えたのが、のちに〝ＹＩＤＦＦの生みの親〟と称されることになる田中さんだった。

山形市制100周年記念事業として開催された山形国際ドキュメンタリー映画祭。市民へのPRイベントも開催された。

山形にドキュメンタリー映画祭を設立するきっかけになった立役者・小川紳介監督（右端）。

「これらほとんどは従来の年中行事に多少着飾ったものであり、いわゆる〝お祭り騒ぎ〟でしかない。（中略）もっと規模の大きいものはないか、一〇〇年目を起点とし将来に継続できるものはないか」

［田中哲著『私の放送史―山形のメディアを駆けぬけた50年』より］

そこで田中さんが提案した一つが、記録映画祭の開催だった。これには、映画『三里塚』シリーズを制作後、山形県上山市に移住して農業を営みながら『ニッポン国　古屋敷村』（一九八二）などを発表していた記録映画作家・小川紳介監督と田

中さんとの親交があったことが大きい。

時代の気運も後押ししたのだろう。一九八五年にソ連ではミハイル・ゴルバチョフ書記長による民主体制「ペレストロイカ(改革)」が起こり、一九八六年にはフィリピンでマルコス大統領による軍事政権からアキノ大統領による民主化政権に代わり、一九八九年は昭和天皇の崩御に始まり、天安門事件、さらにベルリンの壁が崩壊した。実写以上に劇的なことが現実社会で起こり、記録映画の重要性が高まった時でもあった。中でも三〇年続いた要因は、田中さんをはじめとする実行委員たちが映画祭にどんなビジョンを描き、映画祭を実現させていったのか。それに尽きる。

国際映画祭を名乗るに ふさわしい作品を 集めることが先決！

田中さんは創設に際し、日本で行われていた二つの国際映画祭の〝先輩〟である広島国際アニメーションフェスティバル(一九八五年創設)と東京国際映画祭(同年創設)を一九八七年に視察している。広島ではアニメーションの持つ表現力と無限の可能性に心打たれたと同時に、市を挙げての運営と歓迎ぶりに感銘を受けたという。対して、当時、東京・渋谷で行われていた東京国際映画祭には厳しい意見を述べている。

「あの雑踏と騒音の中ではまことに影が薄く、いつどこで何をやっているのか、その存在感が不明な状態であった」［田中哲著『私の放送史―山形のメディアを駆けぬけた50年』より］

田中哲・元理事長。

栄えある第一回の大賞を受賞した『踏切のある通り』のイヴァルス・セレツキス監督。

映画関係者でも国際映画祭へ行くと、レッドカーペットをスターが闊歩(かっぽ)するような華やかな部分だけを見て、映画祭とはこういうものだという認識を抱きがちだ。しかし田中さんは、冷静かつ客観的な視点を持って、今も指摘される東京国際映画祭の問題点を一目で見抜いている。東京に比べて、人口約二五万人の地方都市・山形だからこそ映画に集中できる環境が保てるという確信。さらに田中さんは上映作品を鑑賞し、評論家たちの評判も芳しくなかったことから、国際映画祭を名乗るには、それにふさわしい良質な作品を集めることが先決であることをスタッフとの共通認識に掲げている。

そのために相談を仰いだのが、映画評論界の重鎮である佐藤忠男さんや前述した小川監督であり、実務を行うものとして紹介されたのが矢野和之さんだったという。矢野さんは独立行政法人国際交流基金を経て、映画配給会社「シネマトリックス」を立ち上げ、ユーセフ・シャヒーン監督『アレキサンドリアWHY?』(一九七九)やベルナルド・ベルトルッチ監督『暗殺の森』(一九七〇)などを配給していた。矢野さんは東京事務局長となり質の面で長らくYIDFFを支えることとなる。

かくして、映画が主役のYIDFFの第一回が一九八九年十月十日～十五日に開催された。応募総数は、関係者の予想を大幅に上回る二二一本で、うち八〇本を上映した。日本で初の国際ドキュメンタリー映画祭の開催に映画関係者の期待は高まり、新潟でちょうど『阿賀に生きる』(一九九二)の撮影を行っていた佐藤真監督ら制作チームは、車で山形に駆け付け、馬見ヶ崎川の河川敷にテントを張って寝泊まりしながら参加したという伝説が残っている。期間中の来場者は一万一九二〇人だった。

もっとも映画業界の評価とは裏腹に、やはりスターも来ず話題に上りにくい映画祭は市民の理解を得るのが難しいのか。次第に市の財政難に伴い、映画祭開催年に一億円、準備年に五千万円の助成金が投入されているYIDFFがやり玉にあがるようになった。結果、二〇〇六年に映画祭実行委員会は山形市から独立し、二〇〇七年にNPO法人山形

花笠音頭でゲストを歓迎した山形の市民たち。

国際ドキュメンタリー映画祭となり、運営が民営化された（二〇一四年に認定ＮＰＯ法人山形国際ドキュメンタリー映画祭に名称変更）。

主な批判を要約すると「多額の税金が投入されている映画祭が、市民にどれだけ還元してくれているのか」というものだ。しかしＹＩＤＦＦはその後も年々成長を遂げ、二〇一五年は最多の一六五本を上映し、二万四二九〇人を動員。前回の二〇一七年も一六一本を上映し、二万二〇八九人が来場している。確かに、生産性が問われる現代社会において、文化事業は成果が目に見えにくいかもしれない。しかし築いてきた実績と評価、そして今や世界に名だたるＹＩＤＦＦブランドはプライスレスだ。

懐かしアルバム 1995

河瀬直美監督

東京二〇二〇オリンピック競技大会の公式映画監督を務める河瀬直美監督。〝世界のカワセ〟伝説の始まりはＹＩＤＦＦだった。一九九五年（第四回）の「アジア百花繚乱」部門に短編『につつまれて』（一九九二）と『かたつもり』（一九九四）で参加し、前者は国際批評家連盟賞特別賞を、後者は奨励賞を受賞。河瀬監督にとっては国際映画祭デビューにしていきなりの受賞だった。

この時、「アジア百花繚乱」の審査員だったのが撮影監督の田村正毅さん。河瀬監督の才能に惹かれた田村さんは、河瀬監督がカンヌ国際映画祭でカメラドール（新人監督賞）を受賞した初長編作『萌の朱雀』（一九九七）で撮影を担当した。ＹＩＤＦＦは出会いを育む場所なのだ。

『につつまれて』で一九九五年に参加した河瀬直美監督

未完で上映、非難を浴びた映画が数々の賞を受賞するまで 2

『人生フルーツ』（二〇一六）に『主戦場』（二〇一八）と近年のミニシアターのヒット作といえばドキュメンタリー。しかし一九九〇年代はじめは稀だった。そんな中で劇場公開され、いまだ語り継がれている名作がある。公害事件・新潟水俣病の被害を受けた阿賀野川流域で暮らす人々の日常を映した佐藤真監督『阿賀に生きる』（一九九二）だ。国内外で数々の賞を受賞した同作の成功の陰には、山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）での〝事件〟があった。

阿賀野川流域で暮らす人々と共に約三年間

映画祭に選出されたものの、上映日までに仕上げ作業が間に合わず、未完成のまま上映したという例は、カンヌ国際映画祭のようなメジャー映画祭でもよくある。映画『阿賀に生きる』も、第二回（一九九一）ＹＩＤＦＦの特集上映「日本映画パノラマ館」に〝編集途中のままでいい〟というお墨付きで招待されたのだ。

しかし、16ミリフィルムでの撮影で、音がまだ付いていない状態。佐藤真監督らは熟考した結果、映写機で投影される撮影フィルムに合わせて、上映会場ミューズ（二〇〇八年閉館）に持ち込んだ編集機スタインベックで録音した音声フィルムを同時に流すという荒技を使った。映像と音がずれないよう、スタッフが微調整を行いながらのスリリングな上映は、まさに前代未聞だった。

『阿賀に生きる』は、佐藤監督らスタッフ七人が現地の通称〝阿賀の家〟に住み込み、農作業を行いながら阿賀野川流域で暮らす人々

『阿賀に生きる』の撮影風景。撮影スタッフも共に農業で汗を流しながら地元に溶け込んだ。（撮影：村井勇）

の日常を追った約三年間の記録だ。製作費の多くは、全国約一四〇〇人から集めたカンパ金。一九八九年に撮影がスタートし、スタッフは稲刈りシーズンの撮影を一時中断して第一回のＹＩＤＦＦに新潟から車で駆けつけている。皆で市内を流れる馬見ヶ崎川河川敷にテントを張って寝泊まりしながら貪るように映画を鑑賞し、農業をテーマにした作品に触発されて「自分たちの映画もここで上映したい」という思いを抱いたという。

撮影は一九九一年春に終わった。しかし製作資金が底をつき、編集作業が遅々として進まない。その矢先の同年七月、特集上映「日本映画パノラマ館」の作品選定を行っていた映画館ミューズの元支配人・斎藤久雄と桝谷秀一（現・認定ＮＰＯ法人山形国際ドキュメンタリー映画祭理事）が阿賀の家に訪ねてきた。同特集は現代日本の若手映像作家にスポットを当てたもの。

未完成版の上映は、会場に編集機「スタインベック」を持ち込んで行われた。

撮影現場で佐藤真監督（写真左から二人目）と撮影の小林茂は撮影方法を巡って度々論争した。「正念場シンポジウム」を開き、撮影中の内情まで公にして、同時に資金集めの話題作りに生かした。（撮影：村井勇）

桝谷によると、人選に苦心し、ＹＩＤＦＦ創設の立役者である映画『三里塚』シリーズの小川紳介監督に相談したところ「新潟で撮影している真面目な青年がいる」というアドバイスを受けての訪問だった。二人は約六時間に及ぶラッシュ（未編集）を鑑賞すると、「このままでいいので上映したい」と即決。加えて招待にあたっては、スタッフの宿泊用に短期賃貸マンションを用意し、上映作品見放題のフリーパスを発行するという。第一回のＹＩＤＦＦ期間中、野宿生活を送ったスタッフたちは心躍った。「こんな状態でいいんですか？」と、二つ返事で参加を快諾したという。撮影の小林茂が当時を振り返る。

「何より、ＹＩＤＦＦ開催の十月までには作品を仕上げようという励みになりました」（小林）

二十二時にスタートした上映に暗雲が……

だが冒頭で記した通り、完成までには至らなかった。それでも未完成版は、ラッシュ時より若干短い約三時間半。二十二時にスタートした上映は途中休憩を挟み、午前二時過ぎに終了した。その後ロビーでは、観客も入り混じっての懇親会が開催された。

第２回（1991）の「日本映画パノラマ館」部門で上映された『阿賀に生きる』（未完成版）の舞台挨拶の様子。会場は今は無き映画館「ミューズ」

『阿賀に生きる』（未完成版）の会場の様子。観客の顔が険しい。

映画『阿賀に生きる』のカット表。どんなシーンが何秒使用されているか、細かく記載されている。（撮影：小林茂）

最初こそ和やかな雰囲気だったが、酒が入ったことも手伝って、徐々に雲行きが怪しくなる。あちこちから聞こえてくる批判の声。小林の師でもある柳澤壽男監督からは「佐藤君はあの村で何を見てきたんだ？　昭和電工に対して、まだ（追及の）声を上げていない人もいるだろう。おじいさんと

おばあさんのたわごと話で終わるのか？」と。

厳しい声だった。だが小林はその言葉より、耳を傾けなければならないスタッフの態度の方が気に障ったという。

「佐藤さんの顔は引きつっていたけど、批判の声に一つ一つ真摯に答えていた。なのに他のスタッフ五人は後方にいて、タバコを吸いながら議論の輪の中に入ろうとしない。その様子を見た瞬間『これはダメだ。俺たちのことを言われているんだぞ！』という怒りが込み上げてきたんです」（小林）

小林はスタッフに怒鳴った。そして佐藤監督には、未完成版をラッシュの状態に戻してほしいと懇願し、七人全員で意見を出し合いながら編集することを提案したという。

「スタッフ皆で阿賀の家に住み、それぞれが村人と関係を築いて、互いに影響を受け合い何かしらの変化があったはずなのに、それが作品に表れていない。このままでは佐藤真の小手先だけの映画になってしまう。スタッフが一丸となってこの作品に取り掛かっていなかったことを山形で気付かされました。佐藤さんも寛容でしたね。普通、撮影の立場の者がそんな要求を突き付けたら、けんか別れになってもおかしくない状況です。でも佐藤さんは僕の意見を受け入れ、再編集に応じてくれました」（小林）

上映後、劇場ロビーで行われた懇親会。一見、穏やかだが、佐藤真監督（写真中央）をはじめ、ここで参加者から厳しい批判を受けた。

新潟県内約一〇〇か所に及ぶ自主上映

紆余曲折を経て、『阿賀に生きる』は一九九一年末に完成し、一九九三年に開催された第三回ＹＩＤＦＦのインターナショナル・コンペティション部門に〝凱旋〟した。新潟県内約一〇〇か所に及ぶ自主上映の成功、東京・六本木にあったアートシアターのシネ・ヴィヴァン・六本木（一九九九年閉館）初となるドキュメンタリー映画の公開、文化庁優秀映画作品賞受賞、一九九二年度キネマ旬報ベスト・テン日本映画部門第三位など数々の名誉を携えて。その年の同部門はニコラ・フィリベール監督『音のない世界で』（一九九二）、イグナシオ・アグエロ監督『氷の夢』（一九九二）、フレデリック・ワイズマン監督『動物園』（一九九三）と秀作ぞろいだったが、『阿賀に生きる』は優秀賞を獲得した。

「ＹＩＤＦＦの大きなスクリーンで上映された時にはうれしかったですね。『阿賀に生きる』の撮影はＹＩＤＦＦと同じ一九八九年に始まったわけですが、佐藤さんも僕も助監督経験はあっても自分たちで映画を作るのは初めてで、現場のことは知らない。そんな状況の中、ＹＩＤＦＦに参加したことは非常に勉強になりましたね。『阿賀に生きる』は、ＹＩＤＦＦに育てられました」（小林）

1992年2月に地元新潟で行われた『阿賀に生きる』完成披露試写会の様子。（写真：「阿賀に生きる」製作委員会）

撮影から十年後、佐藤監督＆小林が再び新潟に入り、続編『阿賀の記憶』（二〇〇四）を製作している。さらに二〇年後の二〇一二年には16ミリニュープリント版が製作されてリバイバル公開された。そして毎年五月四日には阿賀野市安田公民館で『阿賀に生きる』追悼集会（主催阿賀に生きるファン倶楽部）が行われている。これは映画の上映と水俣病被害者追悼を兼ねたもので、二〇一九年で二十七周年を迎えた。残念ながら佐藤監督は二〇〇七年九月に急逝したが、『阿賀に生きる』は今も新たな伝説を生み出し続けている。

2019年で27周年を迎えた「阿賀に生きる」追悼集会。阿賀野市安田交流センターで行われた上映会に続き、咲花温泉の宴会には約90人が参加し、思い出話に花を咲かせた。（撮影：藤岡朝子）

なお、ＹＩＤＦＦでは、二〇一三年から作品のフッテージや断片をそのままスクリーンに映し、製作者や専門家はもちろん一般観客なども交えて討論をする「ヤマガタ・ラフカット！」を実施している。少人数で制作することの多いドキュメンタリーはどうしても孤独で思考が内にこもりがちとなるため、幅広い意見を聞くだけでなく、「人に見せる」ことの重要性を認識してもらう目的があるという。ポスト『阿賀に生きる』を発見できるかもしれない。

懐かしアルバム 1993

アレクサンドル・ソクーロフ監督

昭和天皇を描いた『太陽』（二〇〇五）や『エルミタージュ幻想』（二〇〇二）で知られるロシアの巨匠アレクサンドル・ソクーロフ監督。優れたドキュメンタリー作家としても知られ、ＹＩＤＦＦにもサナトリウムの入院患者の記憶を手繰る『ロシアン・エレジー』（一九九三）で第三回のインターナショナル・コンペティション部門に参加した。

すでに国際的にも高い評価を得ていたソクーロフ監督は特別賞にご不満だったようで、受賞者会見では写真のような憮然とした表情に。その後もＹＩＤＦＦでは『精神（ＵＮＪＯ）の声』（一九九五）が第四回（一九九五）の特別招待作品として、『ドルチェ　優しく』（一九九九）が第十一回（二〇〇九）の特集上映「シマ／島―漂流する映画たち」の中で上映されている。

第三回（一九九三）インターナショナル・コンペティション部門で特別賞を受賞した『ロシアン・エレジー』のアレクサンドル・ソクーロフ監督。ご機嫌ナナメな表情。

トラブル多発だった映画祭ゲストと宿泊宿が共に成長 3

二〇一八年の訪日外国人観光客数は過去最多の三一一九万人（日本政府観光局調べ）を突破し、今や日本全国津々浦々で旅している姿を見かけるようになった。しかし山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）が始まった一九八九年当初、地方都市の山形に外国人が大挙してやってくるのは一大事だった。まして家族経営の旅館に泊まるなんて……。ＹＩＤＦＦ開催を契機に育まれてきた草の根の国際交流の歴史に触れる。

第６回のアジア千波万波部門で見事、小川紳介賞を受賞した『ハイウェイで泳ぐ』（1998）の呉耀東監督。

それは、第六回（一九九九）のことだった

アジア千波万波部門に参加する『ハイウェイで泳ぐ』（一九九八）の呉耀東（ウー・ヤオドン）監督と『I Love (080)』（一九九九）の楊力州（ヤン・リージョウ）監督ら台湾一行と、宿泊予定の藤旅館の女将との間でトラブルが発生したという。連絡を受けた映画祭専門員（当時）の宮澤啓さんは藤旅館へ走った。宮澤さんと共に奔走した当時の映画祭事務局スタッフの浅野藤子さんが振り返る。

「藤旅館は昔ながらの家族経営の旅館です。その部屋を見た通訳ボランティア

地元の人の指導を受けながら花笠音頭を踊るフィリピンの漫画家・映像作家のロックス・リー。第３回（1993）に『ハラジュク』（1992）で参加した。

が『こんな部屋……』のような不用意な言葉を発したようで、女将の逆鱗に触れてしまったらしい。『ならば宿泊しなくて結構』という険悪な事態になっていました。事情を聞き、通訳ボランティアと共に女将に謝罪をして、何とかご理解をいただいたそうです」（浅野さん）

国内外から数多くのゲストを迎える映画祭では、交通と宿泊先の手配は重要事項。それいかんでゲストの映画祭に対する印象もガラッと変わってしまう。それを請け負うホスピタリティースタッフの存在は、まさに縁の下の力持ち。ＹＩＤＦＦの黎明期において、宮澤さんはその一人だった。

露天風呂で裸の付き合いをする第3回（1993）のゲストたち。

海外ゲストの定宿となった旅館

ただ映画祭専門員とはいえいきなりのプロではない。回を重ねながらノウハウを蓄積していたところだったが、第一回（一九八九）では一万一九二〇人だった動員数も第三回（一九九三）で二万人を突破と映画祭は成長を遂げていた。その人数を受け入れる宿の確保は急務だ。加えてプレスや評論家など長期滞在者からホテルより安価な宿の要望が出ていた。そこで宮澤さんが掛け合ったのが山形市旅館組合。まずは、第五回（一九九七）にメイン会場・山形市中央公民館近くにあった仙台屋旅館に。第六回（一九九九）は一気に十軒の旅館・ビジネスホテルに、一泊四千円台～の映画祭特別料金で対応してもらえるよう協力を得た。同時にそれらの宿は、家族単位で参加する海外ゲストの定宿となっていく。

呉耀東監督（写真下段・中央）は小川紳介賞、『I Love (080)』の楊力州監督（同・右端）はNETPAC特別賞を受賞し 藤旅館の皆さんから祝福を受けた。

「最初の頃は、韓国ですらまだ軍事政権下にあったため映画祭のレターヘッド付きの招待状をこちらで発行しなければビザが出なかったような時代で、社会主義国家やアジアからゲストを招くのには苦労しました。何通招待状を発送したかわかりません。ときには大使館まで電話したこともありました。そんな状況でしたのでビザが発給されるのならこの機会にと、家族単位で来日するのです。その場合はホテルよりも大人数で宿泊でき、かつ布団が慣れているアジア人には和室の方が快適に過ごせるかと。こちらの予算的にも助かります」（浅野さん）

惜しまれながら二〇一八年に廃業した仙台屋旅館。夜遅く帰ってくる映画祭参加者を寛大な心で見守ってくれた。（撮影　中山治美）

ただ前文で示した通り、ほんのひと昔前の旅館は、必ずしも万人に開かれた場所ではなかった。最近はようやく女性の一人旅も社会に受け入れられてきたが、かつては傷心旅行と疑われ、旅館に泊まろうものなら「自殺するかもしれない」と断られることも多かった。言葉も習慣も異なる外国人ならなおさらだ。和式マナーを熟知していない外国人とトラブルになった例もあるようで後ろ向きな旅館がほとんど。そこで外国人ゲストを受け入れるにあたっては「共同浴場の栓を抜かない」「ゴミの出し方を守る」などの注意事項を徹底することを条件に、協力してくれることになったという。

「その後は藤旅館と呉監督との間では大きなトラブルはなかったようです。あったかもしれませんが、現場レベルで解決できるようになっていたのかもしれません。何より呉監督が小川紳介賞、楊監督もＮＥＴＰＡＣ特別賞（最優秀アジア映画賞）と二人とも受賞するという朗報があって、女将さんたちがたちＹＩＤＦＦのサポーターのようになってくださり、他の旅館の方たちも外国人ゲストの受け入

れに協力して下さるようになりました」（浅野さん）

残念ながら最初に門戸を開いてくれた仙台屋旅館と藤旅館は廃業し、功労者でありＹＩＤＦＦの理事も務めた宮澤さんも二〇一八年九月九日に他界された。だが山形市旅館組合の協力は今も続いており、今年は六軒が協力している。

地域と共にさらに広がる国際交流

彼らが築いた草の根の国際交流は、さらなる広がりを見せている。その一つが山形を代表する温泉地・蔵王温泉で行われる滞在型ワークショップ「山形ドキュメンタリー道場」だ。蔵王温泉観光協会の協力のもと行われるもので、開催はオフシーズンの晩秋で、温泉旅館・松金屋アネックスに各自、自炊しながら逗留し、製作中の作品のブラッシュアップをする。ドキュメンタリーに特化した〝アーティスト・イン・レジデンス〟はアジアで初の試みで、初回の二〇一八年には、日本・インドネシア・マレーシア・フランスなど世界八か国から映像作家や講師など計二十二人が参加した。

インドネシアのドゥウィ・スジャンティ・ヌグラヘニ監督は編集作業に集中できただけでなく、「故郷から遠く離れたことで、毎日、自分の人生・夢・仕事を考え続けた」と語っており、濃厚な時間を過ごせたようだ。同道場を主催するドキュメンタリー・ドリームセンターの代表でＹＩＤＦＦ理事の藤岡朝子さんによると企画の実現には、蔵王温泉に若者を呼び込もうと、かつてロック・フェスティバルの開催にも尽力していた松金屋アネックスの齋藤龍太さんの文化への理解が大きいという。今年（二〇一九年）も十一月八日～十一日に蔵王温泉で開催され、さらに日本とシンガポールの映像作家の交換レジデンシーも行われる。

また学校教育にも取り入れられており、学校単位での映画鑑賞や、映画祭ゲストを学校に派遣してのワークショップも実施されている。

ユニークなところでは期間中、松尾芭蕉の名句「閑さや岩にしみ入蝉の声」で知られる山寺（立石寺）ツアーの英語ガイドを、地元・山形市立山寺中学校の生徒たちが務めるのだ。山寺を登った後は、映画祭ゲストと中学生たちが入り混じっての山形名物・芋煮会が待っている。山形ならではの体験だ。地域を巻き込み、地域に支えられて見出した映画祭の新たな可能性がここにある。

蔵王温泉・松金屋アネックスで行われた山形ドキュメンタリー道場2018の歓迎の宴の様子。
（写真：山形ドキュメンタリー道場）

こたつを囲んでディスカッションをする（写真左から）講師の想田和弘監督、マレーシアの脚本担当のライアン・オンとノヴァ・ゴー監督。
（写真：山形ドキュメンタリー道場）

映画祭参加ゲストを地域の学校に派遣する文化交流プロジェクトも実施している。

映画祭参加者向けの山寺ツアーで、英語でガイドを務めるのは地元の山寺中学校の生徒たち。授業の一環として行われている。
（写真：中山治美）

山寺ツアーですっかり意気投合。『乱世備忘―僕らの雨傘運動』で第15回（2017）の小川紳介賞を受賞した陳梓桓（チャン・ジーウン）監督のカメラで記念写真を撮る参加者たち。
（写真：中山治美）

懐かしアルバム 1993

フレデリック・ワイズマン監督

『ニューヨーク公共図書館　エクス・リブリス』が公開中のドキュメンタリー映画界の巨匠フレデリック・ワイズマン監督。ＹＩＤＦＦの初参加は『動物園』（一九九三）がインターナショナル・コンペティション部門に選ばれた第三回（一九九三）で、山形名物の芋煮に舌鼓を打った。同作は山形市長賞（最優秀賞）も獲得し、さぞや思い出深い旅となったに違いない。

以降、ワイズマン監督の最新作はＹＩＤＦＦが日本初上映というのがお約束のようになっており、『ニューヨーク公共図書館』も第十五回（二〇一七）のインターナショナル・コンペティション部門の上映作品だった。そして今年（二〇一九）も『インディアナ州モンロヴィア』（二〇一八）がインターナショナル・コンペティション部門に選出されている。巨匠、八十九歳（当時）。お元気。

芋煮を食べるフレデリック・ワイズマン監督。左は『私の紅衛兵時代』の呉文光（ウー・ウェンガン）監督。

表現の自由と闘い続ける映画祭 4

「映画は社会を映す鏡」と称されるが、ドキュメンタリーにはダイレクトに時代が反映される。山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）でも人種差別、戦争責任、貧困、災害など……と今起こっている問題を、作品を通して提示し、ときにさまざまな議論を呼んできた。二〇〇五年まで主催し、その後も共催としてＹＩＤＦＦをサポートし続けている山形市の対応は？「あいちトリエンナーレ二〇一九」の企画展「表現の不自由展・その後」の中止問題で行政と芸術の在り方が問われる中、ＹＩＤＦＦを振り返ってみた。

さまざまな争いを描いた作品の上映

ＹＩＤＦＦの魅力の一つに、充実した特集上映がある。そのどれもが刺激に満ちている。第二回（一九九一）の「日米映画戦」は、日米それぞれの視点で捉えられたプロパガンダ映画や記録映像を並べて、第二次世界大戦を検証した。第三回（一九九三）の「世界先住民映像祭」は、世界先住民映像作家連盟に作品選定を一任。市内の空き地に特設野外劇場「先住国シアター」が設営され、アボリジニ、アイヌ、ホピ族など七か国から十一人の先住民族映像作家がいろりを囲んで集った。

さまざまな先住民が一堂に会した第三回（一九九三）の世界先住民映像祭の特設野外劇場の様子。

第３回（1993）の世界先住民映像祭のために、アイヌの方々の協力で空き地に設営された野外劇場・先住国シアター。

しかし同年のインターナショナル・コンペティション部門で大賞のロバート&フランシス・フラハティ賞を受賞したのは、パプアニューギニアで先住民と白人との間に生まれた男と、ガニガ族が共同経営するコーヒー農場が相場の暴落と部族間の争いで崩壊していく悲劇を映した『黒い収穫』(一九九二)。監督がオーストラリア人のボブ・コノリー&ロビン・アンダーソンと白人であることも相まって「植民地主義の視点で撮られた作品」と、世界先住民映像祭の参加者たちが猛反発。授賞式で彼らは、静かに席を立って抗議するという一幕もあった。

第五回(一九九七)は大東亜戦争を振り返る『『大東亜共栄圏』と映画』、第八回(二〇〇三)は「沖縄特集　琉球電影列伝/境界のワンダーランド」、第十回(二〇〇七)は「交差する過去と現在—ドイツの場合」。中東情勢が混沌としていた第十四回(二〇一五)の「アラブをみる—ほどけゆく世界を生きるために」では、パレスチナ解放闘争に身を投じた足立正生監督が作品解説をした。

第15回(2017)の特集上映「政治と映画　パレスティナ・レバノン70s–80s」の時は、足立正生監督によるトークイベントが開催された。(撮影:中山治美)

それらの中には、観る人によっては「反日的」と捉える作品もあっただろう。実際、市が主催していた第九回(二〇〇五)では「在日」をテーマにした特集を行う際、特集タイトルで直接的な表現は避け、「日本に生きるということ—境界からの視線」とした例はあったという。しかしプログラムの内容に関して、市が異論を唱えることはなかったと映画祭関係者は口をそろえる。

共催している山形市文化振興課の杉本肇課長は次のように答えた。

「行政が(上映内容に関して)フィルターをかけるというのはやるべきではないと思っています。そこはYIDFFに信頼してお任せしています」

「わいせつ物」としてフィルム・カットになる

市の姿勢が顕著に表れた事件がある。第五回(一九九七)のフィルム・カット事件だ。それは、YIDFFだけでなく東京国際映画祭(以下、TIFF)をも揺るがした問題だった。

第十回TIFFのシネマプリズム部門に選ばれたロバート・クレイマー監督の短編『映画の未来—ロカルノ半世紀—電気の亡霊』と、YIDFFの特別招待作品であるヴィンセント・モニケンダム監督『マザー・ダオ』(一九九五)が共に性器が映っていたため、「わいせつにあたる」と東京税関からの修正を求められた。

前者は肉体への非人間的な行為を描くことを目的に映像を断片的に組み合わせた作品で、このうちポルノ映画を引用した数か所が問題となった。一方後者は、オランダ国立フィルム・アーカイブが所有していたインドネシアでの植民地経営の実態を映したものを編集した作品で、その中で中国人労働者がシャワーを浴びせられているシーンで性器が映っていた。

YIDFFでは第二回(一九九一)の時、インターナショナル・コンペティション部門の『グッド・ウーマン・オブ・バンコック』(一九九一)を税関に正式に通さず、ヘアが映っていたシーンを無修正で上映し、厳重注意を受けた〝前科〟がある。恐らくそのため、監視の目が厳しくなっていたのだろう。

抗議の声の中心は、先に開催されたYIDFFから発せられた。

検閲に抗議するヴィンセント・モニケンダム監督。

税関の検閲でカットされたことを示した『マザー・ダオ』のポスター。

急きょ行われた検閲に抗議する記者会見の様子。

クレイマー監督はＹＩＤＦＦのインターナショナル・コンペティション部門の審査員でもあったのだ。さらにＹＩＤＦＦに参加していた映画評論家の蓮實重彦や山根貞男ら国内外の映画関係者も「税関による検閲」「ナンセンス」と非難し、東京税関に削除撤回を求める記者会見や署名活動も行われた。

それでも結局、両作とも上映を優先することとし修正に応じた。ただし一九九七年十月十二日付の日刊スポーツによると、クレイマー監督はカットした部分に「日本の税関は人体をカットしても（戦争の映像である）銃はそのまま見せる」というメッセージを入れたいという意向をＴＩＦＦ側に伝えたが「税関ともめたくない」と止められたという。一方『マザー・ダオ』はモニケンダム監督の意向で、カットした十二秒の部分に真っ白なフィルムを挿入して上映した。上映会場ではその部分がスクリーンに投影されると、観客からもブーイングで抗議への賛同を示した。

ヘアが映っていたシーンをカットした代わりに、メッセージを書き込んだフィルムをつなげたヴィンセント・モニケンダム監督。

表現の自由に関わる問題

同じ「わいせつ物」と見なされたとはいえ、『マザー・ダオ』は植民地政策の非道さをリアルに伝える貴重な映像記録である。それでも、警察の差し押さえなどの万が一に備えて、スタッフは密かにフィルムを死守する対策を練っていたというウワサもある。そしてＹＩＤＦＦでは映画祭終了後の「映画上映ネットワーク会議」でフィルム・カット問題に触れ、他の映画祭でも起こり得る表現の自由に関わる問題として話し合いを続けたという。

「当時の行政というのは、今よりもモノの考え方が堅かったと思うのですが、その中でＹＩＤＦＦは自由に企画していてある意味すごいなと思います。わたしが市役所に入った当初は、応援職員としてＹＩＤＦＦに携わる機会があったのですが、上映後の観客と監督のＱ＆Ａは応酬がすさまじく迫力がありました。また台湾映画の上映の際、客席にいた中国の監督が『ところで知らないから聞くのですが、台湾では中国のことをどのように教えているのでしょうか？』という質問が飛んだ場面にも立ち会いました。お互いに眉間にシワを寄せながらでもなく『やっぱりそういう感じなんですねぇ』とほのぼのとやり取りしていたのが面白い。こんなに多様な価値観、文化が交錯する映画祭を行政が行っているとはと感嘆したものです」（杉本課長）

もっとも市民から厳しい声が上がるときもある。観客投票による票が「市民賞」と名付けられているため、第十三回（二〇一三）で基地問題で揺れる沖縄の人たちを描いた三上智恵監督『標的の村』（二〇一三）が受賞した際、市民から「わたしはこの映画を評価していない」という抗議の電話があったという。

「わたしの耳に届いていないだけで、この三〇年の間に同様のことはあったかもしれません。でも個人の意見はあるとして、それが大きな問題になることはなかったと思います。どんな芸術でもスポーツでも、市民全員が好きになるものはありませんし、同じものを見ても、どのように感じるのかは人ぞれぞれだと受け止めています。間口は広く、敷居は低く。まずはいろんな方にＹＩＤＦＦに触れてほしいと思っています」（杉本課長）

第13回（2013）で、三上智恵監督『標的の村』（2012）は市民賞と日本映画監督協会賞をダブル受賞した。写真後方左から崔洋一監督、原一男監督。

特集上映「リアリティとリアリズム　イラン60s–80s」で上映されるカムラン・シーデル監督『雨が降った夜』（1967）。

今年（二〇一九）の特集は、「ＡＭ（アムネシア）／ＮＥＳＩＡ＝オセアニアの忘れられた『群島』」「リアリティとリアリズム＝イラン60s–80s」「春の気配、火薬の匂い＝インド北東部より」など。いずれも過去、いや、今にも続く戦争の影がちらつく地域で、当然、上映作品の中にも反映されている。東京事務局長の濱治佳は今年の特集の意図について語る。

「特集の選び方はそのときのスタッフやメンバーによって異なりますが、今回のイランに関しては第十二〜十三回のアラブ特集を手がけた流れで、中東において、映画のみならず古（いにしえ）より文化交流の深いイランに今回は着目してみました。またオセアニアは日本とアメリカに植民地化されていた島々で、そうした日本とも関係の深い場所が今、どのようになっており、どのような声を上げているのか。今の日本人にとって新たな発見になるのでは？と意識的に考えて特集を組みました。第十回から特集『やまがたと映画』を設けていますが、その中でも山形で従軍した方々の話が出てきていました。東北でオセアニアの作品を紹介する意味があるのでは？と考えています」

特集上映「AM ／ NESIA：オセアニアの忘れられた『群島』」の中で上映される関口典子監督『戦場の女たち　英語版』(1990)。

ＳＮＳの発達で多数の情報が得られる一方、自分の考えを熟考することも、真偽を確かめる時間も用いず、いとも簡単に大きな声に流されやすい傾向にある。その思考を高める場所と時間をＹＩＤＦＦは培ってきた。

ＹＩＤＦＦの初期から参加し、現在理事も務める映画評論家の村山匡一郎は語る。

「ＹＩＤＦＦの場合、ドキュメンタリーとは何か？ではなく、映画文化とはどういうものか？というところから始まったようなところがあります。思想的に右だろうが左だろうが、映画を観てから考えようという姿勢がありました」

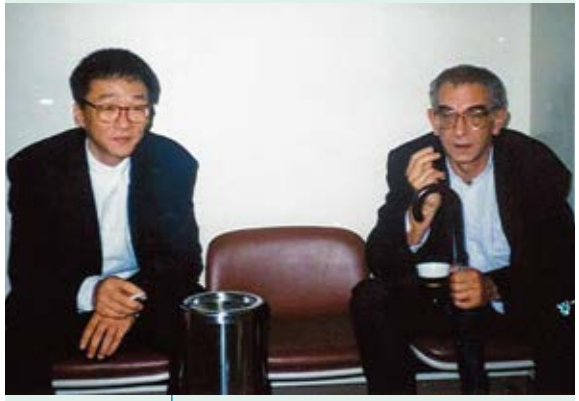
二〇一九年も上映に合わせてのシンポジウムが多数用意されている。熱い日々となりそうだが、それがヤマガタなのだ。

懐かしアルバム 1991

クシシュトフ・キエシロフスキー監督
楊徳昌（エドワード・ヤン）監督

第二回（一九九一）のインタナショナル・コンペティション部門の審査員を務めた『クー嶺街少年殺人事件』（一九九一）の楊徳昌（エドワード・ヤン）監督と『トリコロール』シリーズのクシシュトフ・キエシロフスキー監督が、鑑賞の合間に仲良く一服。しかしキエシロフスキー監督は五年後の一九九六年に五十四歳で、楊監督は二〇〇七年に五十九歳で他界した。

ちなみに『クー嶺街少年殺人事件』は映画雑誌「キネマ旬報」二〇一九年九月下旬特別号の一九九〇年代の外国映画ベストワンに輝いた。天国の楊監督！　朗報届いてますか―？


第二回（一九九一）でインターナショナル・コンペティション部門の審査員を務めた楊徳昌監督（写真左）とクシシュトフ・キエシロフスキー監督

アジアにドキュメンタリー映画が生まれにくいワケ 5

山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）はアジア初のドキュメンタリーに特化した映画祭として一九八九年にスタートした。しかしインターナショナル・コンペティション部門にアジアの作品はなかった。いや、ＹＩＤＦＦが求める作品がなく、選べなかったのだ。そこで〝なぜアジアにドキュメンタリー映画が生まれてこないのか〟をテーマにしたシンポジウム「アジアの映画作家は発言する」が開催され、五時間以上にわたって議論された。それから三〇年。状況に変化はあったのだろうか。

求めているドキュメンタリーがない

第一回（一九八九）の上映本数は八十本。うち今も多くの人に愛されているイグナシオ・アグエロ監督のチリ映画『１００人の子供たちが列車を待っている』（一九八八）など十五本がインターナショナル・コンペティション部門で上映された。その中にはクリスティン・ロイドフィット＆手塚義治監督の日英合作映画『家族写真』（一九八九）も選出されているが、「応募されたものは、文化映画や広報映画などが多く、こちらの求めているドキュメンタリー映画はほとんどなく、上映することができなかった」（ＹＩＤＦＦ発行のカタログ「アジアの映画作家は発言する　アジア・シンポジウム１９８９」より）と運営側の評価。

「アジアの映画作家は発言する　アジア・シンポジウム1989」

つまり当時はまだ欧米のようなドキュメンタリーの定義も市場も確立しておらず、多くのアジアの国では強力な政治、財閥、大企業の元での製作となるため、とても困難な状況だったのだ。

そこで一九八九年十月十四日、山形市中央公民館の大会議場でシンポジウムが開催された。マレーシアの映画作家スティーブン・テオのコーディネートで、ＹＩＤＦＦの立ち上げ人の一人である『三里塚』シリーズの小川紳介監督が司会を担い、フィリピン、台湾、タイ、韓国から総勢九人がシンポジウムに駆けつけたのだ。だがその中には欠席者がいた。その理由が何より、当時のアジアにおける映画製作の状況を物語っていた。

我々ここに出席したアジアの映像作家は、この山形国際ドキュメンタリー映画祭'89にアジアの作品が一本も出品されていないことを悲しく思う。

これは映画祭のせいではないが、アジアにおいては、興味深く見るに値するようなドキュメンタリーを作ることに、大きな障害が存在するのである。

この集まりにおいて、我々は、アジア各国における質の高い映画製作に不可欠な、以下の事柄を確認した。

—ドキュメンタリー映画に対するエネルギーや情熱に欠けることはない。

—質の高い社会的・個人的ドキュメンタリーを製作するための技術に関しては、遜色はない。

—ドキュメンタリーとして映画化するに値する、普遍的・人間的なテーマや題材は数限りなく存在する。

—我々それぞれの文化的視点に基づく、視聴覚ドキュメンタリーを作る才能には欠けることはない。

我々は熱意を持ってここに問う。（アジア以外の映像作家に対する偏見やひがみは一切抜きにして）なぜ、国際的情報交換に貢献する「質の高い、興味深い」ドキュメンタリー映画が、映画製作に必要な物資を十分に持つ国々の手中にあるのであろうか？と。

残念なことに、我々映像作家の視点というのは、現実世界の政治的・経済的な思惑に左右されがちである。また、悲しいことに、これらの構造的障害は国家間の格差や第三世界の現状に根ざすものである。そして、実際にはこれらの事態がすぐに改善することはないであろう。

しかし我々は、これらの困難も我々アジアの映像作家自身の意識的な努力によって克服できると信じる。その

第一歩として、我々はＹＩＤＦＦのような、国際的集まりにおいて作り出されたエネルギーにより奮起させられる。というのも、社会的・個人的な自主ドキュメンタリーが、現代と未来の世代において非常に貴重であるのだと確信させるからである。

それ故、我々はアジアの映画作家としてここに宣言する。困難と解決と視野を分かち合うため、アジア人同士のネットワークを保つことに力をつくすことを。

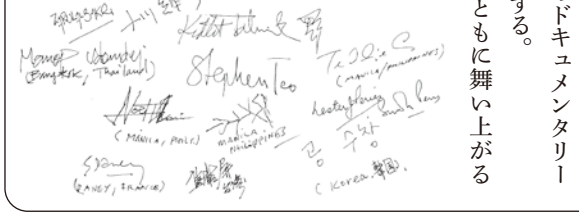
我々はここにアジアにおける自主製作のドキュメンタリーフィルムの改革の種を蒔きたいという願いを披露したい。我々はここに、明るい展望を持って、困難を克服するため努力し向上し、それを果たすことを固く決意する。そうすれば、このＹＩＤＦＦのような未来の国際舞台で、アジア作品の活躍が見られるであろう。

我々はここに、独立したアジアのドキュメンタリー作家たちが生きていることを宣言する。

そしていつの日か、それは風とともに舞い上がるであろう。

山形国際ドキュメンタリー映画祭'89
参加アジア映画作家一同
一九八九年十月十五日

シンポジウム「アジアの映画作家は発言する」後、フィリピンのキドラット・タヒミック監督が起草したアジアのドキュメンタリストの共闘を誓った文章と参加監督たちによる共闘を誓ったサイン。［Ｙ－ＤＦＦ発行のカタログ「アジアの映画作家は発言する」より］



各国の当局による厳しい検閲や弾圧

中国の田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督と陳凱歌（チェン・カイコー）監督に声をかけるも、ビザ取得に必要な国家広播電影電視総局からの許可を得られなかった韓国の映像制作集団「チャンサンコ・メ」のホン・ギソン監督は、脚本で参加した光州事件をテーマにした映画『五月　夢の国』（一九八八）を検閲を受けずに上映したため、韓国の警察から告訴される事態に。その裁判が長引いていたため、共同で脚本を手がけたコン・スチャンのみ登壇した。

シンポジウム内でもたびたび議論に上がった、国や権力者の不都合なことを封じ込めようとする検閲という呪縛。それゆえにもう少し自由に制作でき、劇場公開も見込まれることから生活の心配もなくなる劇映画へと基盤を移そうとする流れ。五時間でも議論が尽くされなかったこれらの問題は第二回（一九九一）でも引き続きシンポジウムが開催され、さらにアジアのドキュメンタリーの活性や発掘を目的とした第三回（一九九三）のアジア・プログラムの設立（現・アジア千波万波）へとつながっていった。

しかしわれわれは、幾度となく検閲やメディア統制に苦しめられているアジアのドキュメンタリストたちの姿を見ることとなる。第十二回（二〇一一）で市民賞とコミュニティシネマ賞をダブル受賞した『イラン式料理本』（二〇一〇）のモハマド・シルワーニ監督は、受賞会見で突然監督引退宣言をした。

当時のイランはマフムード・アフマディーネジャド大統領政権下で、政府の許可のない映画制作および映画祭出品者への弾圧が厳しかった。シルワーニ監督も旧作が一本も上映されていない状態で、にもかかわらず海外で上映して、皮肉にも受賞で注目を浴びてしまったために「イランに戻ってからの身の安全が確保できない」と先手を打っての行動だった。

『イラン式料理本』（2010）で市民賞とコミュニティシネマ賞をダブル受賞するも引退宣言をしたモハマド・シルワーニ監督。（撮影：中山治美）

『映画のない映画祭』の王我監督。（撮影：中山治美）

製作費は映画祭の賞金、基金や私財から捻出

第十五回（二〇一七）では中国当局の圧力によって中止に追いやられたインディペンデント映画祭の一部始終を描いた『映画のない映画祭』（二〇一五）が上映され、王我（ワン・ウォ）監督が「国外の映画祭の中には、検閲を受けた作品しか受け付けないところもある。今後中国の自主映画監督たちの表現の場がどんどん少なくなってしまう」と窮状を訴えた。

また同年、小川紳介賞を受賞したのは陳梓桓（チャン・ジーウン）監督『乱世備忘　僕らの雨傘運動』

（二〇一六）だが、香港の混乱は言わずもがなだ。

それでも一九八九年に、ドキュメンタリー不毛の地であったアジアに、先人たちによってまかれた種は少しずつ成長している。その一人が、今年も上映時間八時間十五分の新作『死霊魂』（二〇一八）を引っさげてインターナショナル・コンペティション部門に帰ってくる中国の王兵（ワン・ビン）監督だ。

王監督は中国の〝不都合な真実〟を撮り続けており、これまで一度も自国の会社から製作資金を得たことはない。廃れゆく中国の国営工場にカメラを据えた『鉄西区』（二〇〇三）は友人や知人から資金を借りて製作し、第八回（二〇〇三）で大賞のロバート&フランシス・フラハティ賞を受賞して得た賞金三百万円で借金を返済したという逸話を持つ。

第15回（2017）に『乱世備忘　僕らの雨傘運動』（2016）で小川紳介賞を受賞した陳梓桓監督。（撮影：中山治美）

第8回（2003）に『鉄西区』（2003）でインターナショナル・コンペティション部門に参加した王兵監督。

『鉄西区』で大賞のロバート&フランシス・フラハティ賞を受賞した王兵監督。

続いて、反右派闘争や文化大革命で粛清された元新聞記者による自分史『鳳鳴（フォン・ミン）――中国の記憶』（二〇〇七）で再び第十回（二〇〇七）のロバート&フランシス・フラハティ賞（賞金二百万円）を獲得し、貧困の中たくましく生きる姉妹に密着した『三姉妹　雲南の子』（二〇一二）では第六十九回ベネチア国際映画祭オリゾンティ部門でグランプリを獲得。

それらの勢力的な活動が評価され、二〇一七年にはオランダの映画博物館「アイ・フィルムミュージアム」が主催するアイ・アート&フィルム賞を受賞し、賞金二万五千ポンド（当時のレートで約三百五十万円）を獲得している。

この度、インタビューに応じた王監督は、現在の製作状況について「中国は特殊な国情もあり、個人企業がごくごくわずかな出資をしている程度で、ほとんどありません。利潤の追求が主の中国映画界では、わたしの作品の配給で収入を得ることはできないと思われているので、通常の商業ベースの出資はありません。ですから、すべての経費を全部自分で賄わなければならないのですが、その製作費を支えているのが『鉄西区』の劇場公開以来関係が深まったフランスやさまざまなアート関係の機関や基金による出資です。さらに世界各国の映画祭で受賞した時の賞金が大きなウエイトを占めています。おそらくその数と額は、他の監督と比べても群を抜いていると思います」と言う。

ＹＩＤＦＦから影響を受けて成長

王監督の初長編劇映画『無言歌』（二〇一〇）のベースとなった、反右派闘争で粛清され、ゴビ砂漠にある再教育収容所に送られた証言集『死霊魂』も準備段階はすべて自己資金だが、その後フランス・スイスから資金を得て完成までこぎつけた。

第16回（2019）のインターナショナル・コンペティション部門に帰ってきた王兵監督『死霊魂』。上映時間は495分。

ＹＩＤＦＦの常連である王監督は同映画祭について「その役割と重要性は計り知れず、受賞したことでわたしの人生は大きく変わりました。現在のような製作方法を続けてこられたのもＹＩＤＦＦに参加して賞をいただいたことからスタートできたからでした。創作者であるわたしにとってＹＩＤＦＦは成長の場であり、強力な後押しをしてくれた場です」と語る。

またスハルト政権下に厳しい検閲があったインドネシアでも新たな動きがある。第十三回（二〇一三）に『デノクとガレン』（二〇一二）でアジア千波万波部門に参加したインドネシアのドゥウィ・スジャンティ・ヌグラヘニ監督は地元のジョグジャカルタ特別州に掛け合い、王族の知人などコネが幅を利かせ、かつ伝統文化のみが対象となっていた助成システムの見直しを提案。二〇一五年に見事地方行政を動かし、ドキュメンタリーも対象としたオープン

地元の公的機関による助成システムの改革を促進したインドネシアのドゥウィ・スジャンティ・ヌグラヘニ監督。（撮影：中山治美）

なシステムへと変わり、ドゥウィ監督自身も助成作品を審査するキュレーターとして関わっているという。立ちはだかる困難を前に、ただ手をこまねいているだけではない。ＹＩＤＦＦのような場所で情報を共有することで、解決策を見出す術を身につけたようだ。

一九九八年に創設された台湾国際ドキュメンタリー映画祭のプログラム・ディレクターの林木材（ウッド・リン）は、ＹＩＤＦＦに影響を受けたことについて「独立精神の重要性」だという。さらに「映画をキュレーションし、上映することで、わたしたち自身の社会と歴史に関心を持ち、再考することの大切さを学びました。ＹＩＤＦＦは創設以来、巨匠から新鋭までアジアのパワフルなドキュメンタリーを公開するための重要なプラットフォームを構築したと思います」とコメントを寄せている。

懐かしアルバム 1993

田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督

第一回（一九八九）のアジア・シンポジウムに出席できなかった田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督だが、第三回（一九九三）にはインターナショナル・コンペティション部門の審査員として参加した。

両親も文化大革命時代に弾圧を受けたが、自身も文革を描いた映画『青い凧』（一九九三）を製作したことで十年間、映画製作を禁じられた時期がある。

苦難の道を歩み続けて熟成した渋い顔は俳優業に生かされ、シルヴィア・チャン監督『妻の愛、娘の時』（二〇一七）では主演も務めたシルヴィアの夫役に抜てき。亡父の遺骨問題で神経とがらせる妻を、側から見守る心優しき夫を好演した。

第三回（一九九三）のインターナショナル・コンペティション部門の審査員を務めた田壮壮監督（右）。

映画祭の夜の社交場・香味庵クラブ 6

山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）を語るには、外せない場所がある。映画祭の夜の社交場・香味庵クラブだ。他の映画祭が、〝ここに行けば会いたい人に会える〟という交流の場所作りに苦心している中、観客もゲストも入り混じり、低料金で深夜遅くまで映画談義にふけることができるという、映画祭の裏メイン会場だ。どのようにしてこの場所が作られたのか。そこには地元・山形市の人たちの文化への多大なる愛情と、見るに見かねた事情があった。

香味庵で奇跡の手打ちも！

香味庵クラブ（以下、香味庵）とは、ＹＩＤＦＦ会期中の連日夜十時～深夜二時に営業する期間限定の居酒屋だ。山形を代表する漬物店・丸八やたら漬が経営している食事処「香味庵まるはち」の営業終了後の店舗を借りているため、店名をとってこの名前に。ＹＩＤＦＦ参加者のみならず一般の人も入場料五百円（ワンドリンク＆乾きものおつまみ付き）を払えば入店可で、あとはどこからか山形名物の芋煮や玉こんにゃく、うどん、りんご、時には一升瓶の日本酒までもが回ってくる。出会った人たちとの会話に夢中になりながら、お腹も心も満たされるという最も映画祭の醍醐味を味わえる場所だ。

アルコールが入った勢いと場の空気も相まって、数々のドラマも生まれた。第十一回（二〇〇九）のシンポジウム「著

香味庵まるはちの土蔵は、大正２年（1913）建造の国登録文化財。（撮影：中山治美）

入場料500円でドリンク１杯とでん六の豆菓子がつきます。（写真：香味庵クラブ）

作権とは、オリジナリティーとは何か」で侃侃諤諤（かんかんがくがく）やり合い一触即発状態まで陥った映画『R・i・P！リミックス宣言』のブレッド・ゲイラー監督と、崔洋一監督率いる日本映画監督協会の面々が、香味庵で奇跡の手打ち。

第十二回（二〇一一）のアジア千波万波部門に参加していた『龍山（ヨンサン）』（二〇一〇・韓国）のムン・ジョンヒョン監督、『監獄と楽園』（二〇一〇・インドネシア）のダニエル・ルディ・ハリヤント監督、映画『水手』（二〇一〇・シンガポール、セルビア、モンテネグロ）のヴラディミル・トドロヴィッチ監督の三人は意気投合し、オムニバス映画『フルーイド・バウンダリーズ（原題）／Fluid Boundaries』（二〇一四）を製作した。

第11回（2009）に行われたシンポジウム「著作権とは、オリジナリティーとは何か」では映画『RiP! リミックス宣言』のブレッド・ゲイラー監督（写真左端）と監督協会の梶間俊一監督と成田裕介監督の間で険悪なムードに。（撮影：中山治美）

意気投合してオムニバス映画を作った（写真左から）ムン・ジョンヒョン監督、ダニエル・ルディ・ハリヤント監督、ヴラディミル・トドロヴィッチ監督。

第十回（二〇〇七）に行われた佐藤真監督の追悼イベントの様子。

香味庵はさまざまな出会いのきっかけに

また『阿賀に生きる』（一九九二）の佐藤真監督が二〇〇七年に急逝された際には追悼イベントが開催されたり、シンポジウムが行われる時もある。そして香味庵での出会いをきっかけに交際へと発展したカップルもいた。香味庵クラブの歴史を見てきた、丸八やたら漬の新関芳則社長が振り返る。

「最初は何かトラブルがあったらと心配していましたけど、一回酩酊した若者を介抱したくらいでしょうか。香味庵まるはちの店舗は、一応国登録文化財なのですが、破損もなければ盗難もありません。わたしが気がついてないのもあるかもしれませんが（苦笑）」

だが香味庵が特別な場所となったのは、その背景によるところが大きい。誕生の経緯も運営もYIDFFが主体ではなく、山形青年会議所が提言したまちづくり任意団体「山形ビューティフルコミッション」や丸八やたら漬、そしてボランティアスタッフという市民の厚意で成立しているのだ。運営している山形ビューティフルコミッションの里見優さんが説明する。

「YIDFF創設当時から山形青年会議所などさまざまな団体が応援していましたが、第二回（一九九一）の時にYIDFF参加者の人たちが上映後、飲み物を片手に立ち話をしていた光景が目に留まったんです。参加者のほとんどは知らない街に来ているわけで、夜にどこへ行ったらいいかわからない。それじゃあ休憩できる場所が必要じゃないかと思ったのです」

「香味庵クラブ」を主催する山形ビューティフルコミッションの里見優さん（写真左）と株式会社丸八やたら漬の新関芳則代表取締役社長。（撮影：中山治美）

さまざまな国・人種の人たちが交わる第6回（1999）の香味庵クラブの様子。

会場に入りきれず外に溢れる人、人……。（写真 香味庵クラブ）

場所の提供の依頼を受けた新関社長も二つ返事で快諾したという。会社的にも、一九九二年の山形新幹線開通で観光客が増えることを見込み、同年十月に食事処の香味庵まるはちをオープンさせたばかりだった。

「山形ビューティフルコミッションの土井（忠夫）さんに頼まれたから……ということもありますが、YIDFFで車道にまで人が溢れてしまっているのを見てましたからね。（自社の）経済効果は大事ですけど、コミュニケーションの場としてお使いいただければ、どうぞ！と思いました」（新関さん）

ドキュメンタリー映画関係者は山形に来なければ始まらない!?

かくして、第三回（一九九三）から始

まった。当初の経費は山形ビューティフルコミッションの持ち出しで、参加者は無料だった。二回目からは有料にしたが、それでも物価の異なるアジアからの参加者の懐具合を鑑みて二百円に設定した。現在は五百円だが、それでも芋煮などを提供している香味庵は材料費にもならない額だという。

加えてスタッフはあくまでボランティアで、皆、本業との掛け持ちだ。深夜二時の閉店だが最後の客を見送るのは深夜の三時を過ぎる。そこから片付けをすれば明け方。そのままほとんど寝ずに本業に向かうスタッフも多いという。今年の営業は十月十一日～十六日の六日間。スタッフの苦労がしのばれる。

マックスになると満員電車状態。（写真：香味庵クラブ）

蔵の2階は底が抜けるので、50人限定の特別空間。

それでも香味庵クラブを続ける理由について里見さんが胸の内を明かす。

「苦しかった時もあるのですが、山形市がある程度YIDFFを応援してくれているから、わたしたちも盛り上げたいという気持ちがあります。一時期、市議会でYIDFFの予算（平成三十一年度は一億円）が問題となり、無駄じゃないか、他の案件に回せるのじゃないかという声が上がったことがあったのです。でも『文化というのはそういうものじゃない』と歴代の市長が非常に理解を示してくれた。わたしも六十代となりヘロヘロなので、若い人にバトンタッチしないとと考えてますが、このまま回を重ねて

まだ香味庵内でタバコを吸っていた第11回（2009）の頃。

香味庵の土蔵2階は改装し、畳敷きになりました。（撮影：中山治美）

いけば、（フィルムライブラリーも設けていることから）ドキュメンタリーを研究している人は山形に来なければ始まらないぐらいの場所になるのではないでしょうか」

もちろん課題もある。香味庵の通常営業時はせいぜい一八〇人ぐらいの入店が限度だそうだが、第十五回（二〇一七）は過去最高の一晩で五〇〇人が押し寄せたという。店外まで人が溢れている光景は壮観ではあるが、騒音ならびに喫煙者のタバコの吸い殻と煙が近隣住民の生活を脅かしている。

「路上に落ちているタバコの量はすごいですよ。映画関係者はもっと健康に気をつけてほしいものですね」（里見さん）

自分たちが築き上げてきた場所を守るために何をすべきか。皆まで言うまい。

懐かしアルバム 1993

アッバス・キアロスタミ監督

『桜桃の味』（一九九七）で第五十回カンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞したイランの巨匠アッバス・キアロスタミ監督は、第三回（一九九三）のインターナショナル・コンペティション部門の審査員を務めた。

日本を愛し、『5 five ～小津安二郎に捧げる～』（二〇〇三）や日本で撮影を行った『ライク・サムワン・イン・ラブ』（二〇一二）を制作し、東京藝術大学でワークショップを行ったこともある。二〇一六年七月四日に闘病先のフランス・パリで死去。享年七十六歳。写真右側の女性は、通訳・製作などあらゆる面で日本滞在中のキアロスタミ監督をサポートしたショーレ・ゴルパリアン。

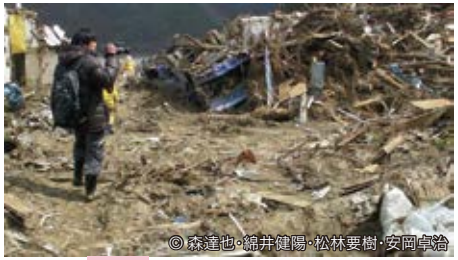
第三回（一九九三）のインターナショナル・コンペティション部門の審査員を務めたアッバス・キアロスタミ監督

7 東日本大震災後を追い続ける映像作家たち

東日本大震災が起こった二〇一一年。山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）では即座に東日本大震災復興支援上映プロジェクト「ともにあるCinema with Us」を始動させ、第十二回（二〇一二）では被災地を捉えた二十九本の映画の上映とシンポジウムを開催した。惨状をダイレクトに伝えた作品はどれもが生々しく、心をざわつかせた。中でも森達也らが共同監督を務めた『３１１』（二〇一二）は論争を巻き起こすこととなる。もはや災害大国となった日本を映像作家たちはどのように見つめてきたのだろうか。

未曾有の大惨事にいても立ってもいられず

ドキュメンタリー映画『３１１』は、映画監督・森達也と松林要樹、戦地での取材経験も豊富な映像ジャーナリスト・綿井健陽、原一男監督『ゆきゆきて、神軍』（一九八七）の助監督を務めた映画プロデューサー・安岡卓治の四人が東日本大震災発生から二週間後に、福島、宮城、岩手と車を走らせた映像記録だ。未曾有の大惨事にいても立ってもいられず、カメラ片手に現場視察に向かうのは彼らの性分。



東日本大震災２週後の景色と人々の混乱ぶりが収められている映画『311』。

第12回（2011）の『311』上映後、質疑応答を行った（写真左から）森達也監督、安岡卓治監督。（撮影：中山治美）

だが目の前の惨劇に言葉をなくし、放射能の脅威にうろたえ、何を取材すべきかさまよった。百戦錬磨の彼らですらなすすべもない状態に、被害の大きさを実感させられた。さらに遺体発見現場に遭遇してカメラを向けたところ遺族から棒を投げつけられる場面もあり、災害報道の在り方を突きつけられた。

舞台裏むき出しの内容に、観客の意見は賛否分かれた。痛烈に批判した一人が、日本映画学校（現・日本映画大学）教授でもある安岡プロデューサー（以下、安岡Ｐ）の教え子で、ドラマ『山田孝之の東京都北区赤羽』を山下敦弘監督とともに手掛けた松江哲明監督だ。松江監督が説明する。

「ＹＩＤＦＦで観た後、安岡さんに『これって全部ＮＧじゃないですか』と言いました。未編集のものをそのまま上映したと思ったのです。安岡さんからは学生時代、〝安易にドキュメンタリーを撮るな〟と指導されてきたし、音も大事だと散々指導を受けていた。なのに何もかもが整理されていないままで、言っていたことと全然違うじゃないですか！という気持ちだったのです」

安岡Ｐにとっては批判も覚悟の上での上映だったという。作品の明確なビジョンもないまま向かった被災地で味わったのは、自分たちの無力さであり、それでも何か取材しなければと題材を探した自分たちの鬼畜さで、全員が自己嫌悪に陥った。だから松江監督の批判も「その通り」と受け止めたという。

第6回（1999）に『A』（1998）で参加した（写真左から）安岡卓治プロデューサー、森達也監督、右端に『あんにょんキムチ』（1999）の松江哲明監督。

「作り手の僕らの最低なところが全部出ている。きれいごとで並べて作ることはいくらでもできるけど、この映画は本来なら外すべきと考える部分を中心に編集しました。それを出すのが、自分たちの責任だとも思いましたし、総括して、これが俺たちなんだと自己確認しなければ次へは進めない。そういうつもりで作品にしました」と安岡Ｐが当時を振り返る。

継続して被災地と向き合う

その言葉通り、映像作家として足元を見つめた四人はそれぞれの場で、震災後の世界を追い続けている。綿井監督は戦場に戻りドキュメンタリー映画『イラク　チグリスに浮かぶ平和』（二〇一四）を制作し、森監督は『FAKE』（二〇一六）に続いて『i―新聞記者ドキュメント―』（二〇一九年十一月十五日公開）で日本の報道の問題点に切り込む。松

林監督は『祭の馬』(二〇一三)で福島第一原発事故の影響の大きさを追い、安岡Pは継続して被災地と向き合っている。安岡Pが『３１１』以降に携わった震災関連映画は、編集で参加した『遺言原発さえなければ』(二〇一四)、プロデューサーを務めた『赤浜ロックンロール』(二〇一四)など、実に七～八本に及ぶという。

さらに、サポートした作品もある。我妻和樹監督の映画『波伝谷(はでんや)に生きる人びと』(二〇一四)だ。あのＹＩＤＦＦでの『３１１』の上映後、夜の社交場・香味庵で安岡Pに声をかけてきたという。以来、二人の交流が始まった。

「香味庵で何を話しかけたかよく覚えていないのですが、震災のこととかではなくて、ドキュメンタリーの撮影姿勢に関することだったような気がします。安岡さんは、何者でもない若者の僕に対して適当な対応をせず、真面目に話を聞いてくれました。多分、(自分の)熱さは伝わったのだと思います。そして名刺をくれました。その日、ホテルで泣きました。安岡さんの対応がうれしかったのと、映画は出来てないけど、あきらめたくない、きっと山形に戻ってくると思って泣きました」(我妻監督)

宮城県南三陸町の漁村、波伝谷の人たちの震災前の生活を切り取った我妻和樹監督『波伝谷に生きる人びと』。

第十五回(二〇一七)に『願いと揺らぎ』(二〇一七)でインターナショナル・コンペティション部門に選出された我妻和樹監督。(撮影　中山治美)

我妻監督は東北学院大学文学部史学科出身。在学中の二〇〇五年より、同大の民俗学研究室と東北歴史博物館との共同で、宮城・南三陸町波伝谷の民俗調査に参加した。土地とそこに生きる人たちに魅力を感じた我妻監督は、卒業後も波伝谷に通い、ドキュメンタリー映画の制作に着手していた。しかし編集作業に入っていた時に東日本大震災が起こり、波伝谷も我妻監督自身も被災した。波伝谷で親しくしていた人たちも犠牲となり、しばらくは彼らの姿も映した二四〇時間の映像と向き合う心境にはなれなかったという。

そんな時、ＹＩＤＦＦで「ともにあるCinema with Us」と題した特集上映が組まれるというニュースを耳にした。震災後に作られた映画がたくさん上映される中で、未だ震災前の映像を映画として形にできていないことを恥ずかしく思っていた我妻監督は、山形へ行くべきか否か、迷った。しかし「逃げてはいけない」(我妻監督)と自分を奮い立たせてＹＩＤＦＦに参加したのだった。

出会い以降、安岡Pは南三陸で行った我妻監督の試写会に駆けつけただけでなく、「すごい映像だから、二時間に納めればきっと劇場でも上映できる」と何度かアドバイスもしてくれたという。安岡Pが我妻監督の作品に惹かれた理由を語る。

「彼の民俗学研究映像も観ましたけど、波伝谷地域の伝統芸能や風習をきっちり撮っていてすごく重心が低くていいなぁと思いました」

第14回(2015)の「ともにあるCinema with Us」では『首相官邸の前で』(2015)の監督で社会学者の小熊英二(写真中央)もディスカッションに参加した。(撮影：中山治美)

かくして『波伝谷に生きる人びと』は二〇一三年に完成し、誓い通り、第十三回(二〇一三)のＹＩＤＦＦ「ともにあるCinema with Us」で上映されて山形に帰ってきた。続いて、震災後の波伝谷を追った『願いと揺らぎ』(二〇一七)は第十五回(二〇一七)のＹＩＤＦＦインターナショナル・コンペティション部門に選出された。同作は復興に向けて徐々に歩みはじめた波伝谷の人たちを捉えつつ、『３１１』にも通じる、どこまで彼らの心に踏み込んでいいのかに苦悩する撮り手の素直な〝揺らぎ〟がそのまま映し出されていた。そして今、南三陸を舞台にした新作の編集を行っている最中だという。

「今よりも、何もない若者だった二〇一一年当時の方がいろんな思いを抱えていたように思います。そして山形にはそうした若者がたくさん来ていると思うんですね。きっと僕が経験したような大事な出会いがたくさんあるんだろうなと思います」(我妻監督)

日本同様、台湾でも災害映像記録の意義に注目

そして今年も二年に一度の、映画を通して震災後の日本を総括する濃厚なひとときがやってくる。今回は台湾文化部並びに台北駐日経済文化代表処台湾文化センターとの共催で、日本同様に災害の多い台湾と災害映像記録の重要性とその文化の意味を問う。日本からは、東日本大震災の時にボランティアで訪れたのをきっかけに岩手・陸前高田に移住し、『息の跡』(二〇一六)で第十四回(二〇一五)の「ともにあるCinema with Us」に参加した映像作家・小森はるかが、アートユニットを組む画家・瀬尾夏美と制作した新作『二重のまち/交代地のうたを編む』で再び、参加する。

ちなみに今回、松江監督に改めて『3.11』の上映時の安岡Pに放った言葉の真意を確かめようと連絡したところ、実は同作のDVDを購入していたことが判明した。

「しかも結構繰り返し観ているんですよね(苦笑)。森達也さんたちが冷静さを失うぐらいの惨事で、あの熱狂の中で作った映画なのだと感じます。しかも、当時の社会のもやもやとした空気まで全部映っている。今の社会が全部スルーしているものがここに映っているから、あの時の感情を忘れないためにも観なきゃという気持ちになります」(松江監督)

そして安岡Pは語る。

「松江監督も彼なりに悩んで、『3.11』の上映後、〝僕は絶対被災地は撮りません。東京を撮ります〟と『トーキョードリフター』(二〇一一)で3.11直後の自主規制や計画停電で街から明かりが消えた東京を撮った。皆、自分のスタンスを取り戻す大きな出来事だった。まさに時代の裂け目で、あそこから人間や社会の在り方だけでなく、嫌というほどの日本の政治構造や利権構造が一気に見えてきた。映画だけでなく、美術や文学もそれとどう向き合うのかが、今、問われているのではないでしょうか」

第12回(2011)に行われたシンポジウム「震災と向き合って」に参加した(写真左から)安岡卓治、森達也、台湾映画『生命(いのち)−希望の贈り物』(2003)の呉乙峰(ウー・イフォン)監督。(撮影:中山治美)

今年(2019)の「ともにあるCinema with Us」で上映される黄淑梅(ホアン・シューメイ)監督の『台湾マンボ』(2007)。

小森はるか・瀬尾夏美監督『二重のまち/交代地のうたを編む』

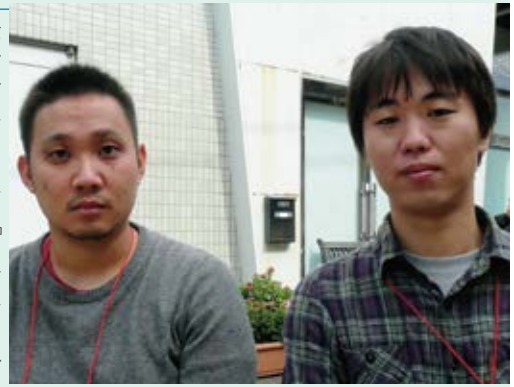
懐かしアルバム 2011.02

濱口竜介監督

映画『ハッピーアワー』(二〇一五)が第六十八回ロカルノ国際映画祭、映画『寝ても覚めても』(二〇一八)が第七十一回カンヌ国際映画祭に選出され、海外でも注目を浴びる存在となった濱口竜介監督。

濱口監督も東日本大震災時に東京藝術大学大学院映像研究科監督領域の同期だった酒井耕監督と〝東北記録映画三部作〟を制作し、第十二回(二〇一一)「ともにあるCinema with Us」にも参加している。東北での活動はその後の創作活動に大きな影響を与えており、『寝ても覚めても』でも原作にはない東日本大震災のシーンを加え、あの日を境に変わった人の心や社会の変化を表現している。

濱口監督は、今秋にフランス・パリ日本文化会館で行われたレトロスペクティブに寄せた文章で「酒井耕との共同監督による東北記録映画三部作で捉えた震災後を生きる東北の人々の魅力は、それを引き出すための〝聞く〟ことや関心の力をわたしに啓示した。そのことは直接的に『ハッピーアワー』における演者たちとの共同作業へとつながっている」とつづっている。



第十二回(二〇一一)に『なみのおと』で参加した時の(写真左から)濱口竜介監督と酒井耕監督。(撮影 中山治美)

中学生約300人が映画で世界の苦悩を知る…内戦後のボスニア描く『約束の地で』を鑑賞

8

十月十日～十七日まで開催された第十六回山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、ＹＩＤＦＦ）の入場者数がこのほど発表された。台風十九号の影響を受けて山形入りできなかったゲストも多かった中、入場者数は第十五回よりも七六九人増の二万二八五八人。プレス登録者三二五人のうち海外からの参加者は、過去最高の八十二人となった。十二月六日には病気療養中だったＹＩＤＦＦ理事長・大久保義彦さんの訃報も届いたが、次代に向けての布石は会期中から打たれていた。

『約束の地で』のクローディア・マルシャル監督（写真中央）を囲んで記念撮影を行った山形の中学生たち。

生きた世界史の授業として映画祭に参加

十月十一日、映画祭会場の一つである山形市民会館には続々と学生たちが集まっていた。この日は、山形市立蔵王第二中学校、同高楯中学校、同第三中学校の生徒約三〇〇人による集団映画鑑賞が行われたのだ。海外では授業の一環として学校やクラス単位で映画祭に参加するのは当たり前の光景だが、受験に直結する授業が優先される日本ではまれ。しかしＹＩＤＦＦでは第十二回（二〇一一）からこの取り組みが行われているという。

彼らが鑑賞したのはインターナショナル・コンペティション部門のクローディア・マルシャル監督『約束の地で』（二〇一九／フランス）。内戦後のボスニア人の苦悩と現実を、ボスニアで暮らす姉と、結婚してフランスで暮らす妹の両方の視点から描いた作品だ。上映プログラムの中からどの作品を選択するかは学校側の意向を取り入れながらＹＩＤＦＦ事務局と話し合って決めるそうだが、学生にとっては何よりの生きた世界史の授業となる。

彼らが普段見慣れているエンタメ作品とは違う。重く、辛い現実を直視させられる内容だ。しかし学生たちは静かに、真摯に、七十七分間スクリーンを見つめた。上映後のＱ＆Ａでは積極的に手をあげて「なぜこの映画を撮ったのですか？」「撮影期間はどれくらいですか？」などの質問をマルシャル監督にぶつけただけでなく、自分の感想も述べた。

「この作品を見てすごく苦しんでいる人たちがたくさんいて悲しくなった。僕はそういう人たちを助けていきたいと思った」

「わたしたちが今のような生活ができるのは当たり前だと思っていたけど、戦争がなく、平和で幸せな生活を送れることはありがたいことなのだなと思いました」

「この映画を見てわたしは、世界中でいろんなことで苦しんでいる人たちがいることを知り、それが心に残りました」

シンプルだが素直な感情がこもった言葉はマルシャル監督を感激させ、学生たちで埋まった客席を撮影に協力してくれた姉妹に送るのだと写真を撮っていた。小規模かもしれないが、山形－フランス－ボスニアを結ぶ国際交流が芽生えた瞬間だ。

期間中に行われた「目指せ！　バイリンガルレポーター！　世界の監督に突撃インタビュー！」の様子。でもこの時は監督の息女へのインタビューでした。（撮影：中山治美）

次世代へつなげるため、育むきっかけづくり

会場の外では、外国人ゲストに子どもたちが英語でインタビューを実施した日もあった。これはＹＩＤＦＦの協賛企業であるジェイムズ英会話とのコラボレーション企画で、子どもたちに英語を使ったコミュニケーションを体験してもらうもの。同様の企画は映画祭恒例のゲスト向けの山寺ツアーでも行われ、地元・山寺中学校に加えて今年は蔵王第二中学校の生徒も参加して英語でガイドした。

そして表彰式では、観客賞にあたる市民賞の発表を、高校生ボランティアの渡邉沙采（わたなべさあや）さん、槙葵（まきあおい）さんが担当した。観客層の高齢化問題は映画業界全体の課題ではあるが、

いかにしてＹＩＤＦＦを次世代へつなげ、育んでいくか。そのきっかけ作りがいたるところで行われていた。

もともと山形は、映画への理解が深いという下地はあった。ＹＩＤＦＦの上映会場でもあるフォーラム山形（一九八四年開業。二〇〇五年に現在地に移転。スクリーン数五）とソラリス（二〇〇〇年開業。スクリーン数六）は、全国でも珍しい市民株主によって誕生した映画館だ。一般社団法人コミュニティシネマセンターによる「映画上映活動年鑑二〇一八」によると、都道府県別一スクリーン当たりの人口は、石川県の一万八七三七人に次ぐ一万九四六一人で全国二位。この数字は、市民にとって映画館がどれだけ身近にあるかを示しており、一人当たりの年間鑑賞回数も一・三回。（ちなみに東京は一スクリーンあたりの人口は三万六六二三人で、一人当たりの年間鑑賞回数は二・〇回。大阪は三万九三九五人で一・六回）。

表彰式で市民賞の発表を務めた高校生ボランティアの渡邉沙采さん、槙葵さん。（撮影　中山治美）

これらの数値に貢献している一つが、教員による山形市教育研究会メディア教育部会で、小・中学校の長期休暇期間に市内で上映される映画の中から推薦映画を選定し、生徒たちの各家庭に作品リストと特別割引券を配布するという〝伝統〟が長年続いているという。二〇一九年夏休みの推薦映画リストには、『天気の子』から『ワイルド・スピード／スーパーコンボ』や『いつのまにか、ここにいる Documentary of 乃木坂46』まで柔軟な視点で幅広い作品が入っているから驚きだ。

YIDFF会期中に山形まなび館では「新たな創造都市拠点設立へ向けて」と題したシンポジウムも開催された。（写真左から）東北芸術工科大学デザイン工学部映像学科・加藤到教授、映画保存協会代表・石原香絵、国立映画アーカイブ館長・岡島尚志。（撮影：中山治美）

この公教育と映画の連動は、山形市が二〇一七年にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）創造都市ネットワークに映画分野で加盟認定されたことで、ますます盛んになっている。ユネスコ創造都市ネットワークとは、グローバル化が進んで固有文化の喪失が危惧される中、文化の多様性を保持する目的で、七つの分野（クラフト、デザイン、映画、食文化、文学、音楽、メディアアート）において都市間で戦略的連携を行っていくもの。

映画分野で認定されたのは、韓国・釜山やイタリア・ローマなど十八都市（二〇一九年十二月現在）。山形市や認定ＮＰＯ法人山形国際ドキュメンタリー映画祭などで組織する山形市創造都市推進協議会では映画を軸に多様な文化資産を結びつけた地域振興を実施している。山形市文化振興課の杉本肇課長は「行政の力だけでユネスコの認定が取れたとは思っていません。三〇年も続けられてきたＹＩＤＦＦがあるというのが一番の背景ですし、ＹＩＤＦＦ事務局の方が築いてきた海外とのネットワークがあってこそだと思っています」。

ミニ・ユネスコ会議を開催

活動の拠点となるのが、山形県で最初の鉄筋コンクリート製校舎で、国の登録有形文化財となっている山形市立第一小学校旧校舎（現・観光文化交流センター山形まなび館）を活用した「Ｑ１（キューイチ）プロジェクト」。二〇二二年の本稼働を目標に活用実験や再整備工事を行っていくもので、ＹＩＤＦＦ会期中も同校舎内にあるブックカフェ「Day & Books」で「ユネスコ映画創造都市を知ろう！　話そう！」と題したお茶会を開催。

YIDFF期間中にフォーラム山形で開催されたやまがた創造都市国際会議2019「世界とつながる映画のチカラ」に登壇した（写真左から）NHKディレクターの倉崎憲、俳優・眞島秀和、大友啓史監督。眞島は山形県出身。（撮影：中山治美）

県内初の鉄筋コンクリート校舎・市立第一小学校旧校舎をリノベーションした山形まなび館。ここを再整備する「Q1プロジェクトが始動中だ。（撮影：中山治美）

YIDFF期間中、山形まなび館地下交流ルーム（ギャラリー）では「やまがたと映画」と題した企画展が開催された。（撮影：中山治美）

同じくユネスコ映画創造都市に認定されているポーランドのウッチから、アンジェイ・ワイダ監督らを輩出したウッチ映画大学出身の『海辺の王国で』の慶野優太郎監督、アイルランド・ゴールウェイから、ゴールウェイ映画祭プログラム・ディレクターのウィリアム・フィッツジェラルド、そして地元・山形県立山形東高等学校探究部部員が参加し、互いの街の取り組みを語り合う〝ミニ・ユネスコ会議〟だ。

海外との交流を目的に制作された探検部制作の山形PR短編映画も上映し、意見交換もしたのだが、その際、部員自ら英語でプレゼンテーションを行った。日本の若者の内向き志向が叫ばれているが、YIDFFではそれとは無縁の若者たちの頼もしき姿を至るところで目にした。

YIDFF終了後も事務局の活動は続いている。山形市平久保の山形国際交流プラザ(山形ビッグウイング)内で、インターナショナル・コンペティション部門の応募作を中心としたドキュメンタリー映画の秀作を収集・保存し、一般の人たちが自由に閲覧できるフィルムライブラリーを運営。試写室も併設し、第二・四金曜の毎月二回は上映会も行っている。何よりドキュメンタリーに特化したライブラリーは世界でもまれで、海外からも専門家が訪問しては、山形に長期滞在して研究に没頭する人も多いという。

山形まなび館内のカフェ Day&Booksで行われた「ユネスコ 映画創造都市を知ろう!話そう!」と題したお茶会。県立山形東高校探究部の生徒たちが参加した。(撮影:中山治美)

「特に中国はまとめて収集しているところはありませんし、当局に没収されてしまうこともあるのでここで保存されていることが非常に重要となっています。また津波被害に遭ったインドネシアの監督から、作品の素材も流されてしまったので『フィルムライブラリーで保存している自分の作品をコピーさせてほしい』という連絡を受けたこともありました」(事務局スタッフ)

山形国際交流プラザ内にある山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー。(撮影:中山治美)

ほか「子どもの映画教室」、映画祭の受賞作を中心に東京で翌年に上映会を行う「ドキュメンタリードリームショー―山形in東京」も恒例となった。YIDFFの次回開催は二年後の、二〇二一年。YIDFFの認知度を高める努力だけでなく、次代の制作者や観客を育成することにも余念がない。YIDFF理事の藤岡朝子が語る。

「NPO法人になって初めて開催した二〇〇七年、前回より三四二四人増の二万三三八七人の観客が全国から集まったのは、『山形映画祭はもう終わりだ』というウワサが流れたからでした。市から独立することは財政基盤がなくなり、これまでのような映画祭の形は維持できなくなるのでは?とファンの皆さんが心配してくれた結果でした。実際はNPO化したことで膨大な事務仕事を事務局でまかなわなくてはならなくなり、総務経費もかかってきましたが、山形の事務局内の士気は高まり、映画祭以外のさまざまな事業(子どもの映画教室、県内出張映写、自主上映会の営業活動、大学とのコラボレーションなど)に積極的に取り組むことになりました。スタッフの自主性とやる気は花開いたと思います。今でも山形市の補助金なくしては存在できませんが、三〇年前と違って文化芸術は行政主導ではなく、自律的で自主的な活動として援助を受けながら、表現の自由と独立性を維持する方向に向いているのではないでしょうか。一方で、皮肉なことに認定NPO法人という公益的な団体としての自覚が高まったせいか、初期のようなとんでもなくラジカルなプログラムが影を潜めた気もします」

試写室(左上)。客席数40席。毎月2回金曜上映会が開催されている。フィルムライブラリーに保管されている約8,000本の作品たち(左)。ビデオブース(上)。長期滞在して視聴に没頭する専門家も多いという。(撮影:中山治美)

最後に、作品を出品している製作者にとってYIDFFの存在意義をどう捉えているのか。第十六回のインターナ

ショナル・コンペティション部門の審査員で、映画『風の電話』（二〇二〇年一月二十四日公開）の諏訪敦彦監督がＹＩＤＦＦの会見で語った言葉を記したい。

「日本で撮影するたびに痛感するのは、『こんなにもわかりやすくしなければいけないのか』。〝わかりやすいことが善である〟ということです。もともと映画というのは、人の想像力を奪うという罪を犯す場合もあるし、人の想像力を育てていく可能性も持っています。そのことに無自覚でいると全てわかりやすく、わたしたちは何も考えなくて良いという傾向になってしまう。それには抵抗しなければいけないと思っていますし、そうじゃない場所を確保しなければならない。それは映画に関わる人間が、死守しなければいけない問題だと思っています。（文化に理解がある）フランスの映画人だって死守してきたのです。ただ、日本においてそれが行われている場所は非常に少ない。その数少ない場所が、ＹＩＤＦＦだと思っています」

ラインナップ会見でＹＩＤＦＦの意義について語ったインターナショナル・コンペティション部門の審査員を務めた諏訪敦彦監督。（撮影　中山治美）

二〇一九年はあいちトリエンナーレにＫＡＷＡＳＡＫＩしんゆり映画祭など行政が関わる文化事業の「表現の自由とは何か」に揺れた一年でもあった。ＹＩＤＦＦも他人事ではないかもしれないが、少なくとも行政や市民と共に試行錯誤を続けてきた三〇年の歴史と実績がある。何よりの身近にある好例を行政をはじめ文化事業に携わる人たちは再検証すべきではないだろうか。

懐かしアルバム　2007

映画評論家・蓮實重彦氏
アピチャッポン・ウィーラセタクン監督
ペドロ・コスタ監督

ＹＩＤＦＦではこれまでも国内外の著名人がインターナショナル・コンペティションの審査員を務めてきたが、第十回（二〇〇七）もこのスリーショットだけでも映画ファン垂涎もの。東京大学元総長にして、文芸・映画評論家であり、小説家、フランス文学者の蓮實重彦氏、タイのアピチャッポン・ウィーラセタクン監督、ポルトガルのペドロ・コスタ監督だ。

その後、蓮實は二〇一六年に小説「伯爵夫人」で第二十九回三島由紀夫賞受賞。ウィーラセタクン監督は『ブンミおじさんの森』（二〇一〇）でタイ映画史上初となるカンヌ国際映画祭パルム・ドールを受賞、コスタ監督『ヴィタリナ（仮題）』（第二十回東京フィルメックスで招待上映）はロカルノ国際映画祭で金豹賞を受賞と、共に最高賞に輝いている。

第十回（二〇〇七）のインターナショナル・コンペティション部門の審査員を務めた（写真左から）映画評論家・蓮實重彦氏、アピチャッポン・ウィーラセタクン監督、ペドロ・コスタ監督。

この冊子は、映画情報サイト「シネマトゥデイ」に掲載された、中山治美さんによる連載「山形国際ドキュメンタリー映画祭30年の軌跡」をまとめたものです。

冊子化にあたり、記事をご提供いただきました中山治美さん、ご理解を賜りましたシネマトゥデイの皆さんに深く感謝申し上げます。

尚、「シネマトゥデイ」初出時の誤字等は修正の上掲載しています。

[第一回]スターも来ない、地味な記録映画の祭典が三〇年も続いたワケ
＋ 懐かしアルバム　河瀬直美監督　（二〇一九年八月一日）
[第二回]未完で上映、非難を浴びた映画が数々の賞を受賞するまで
＋ 懐かしアルバム　アレクサンドル・ソクーロフ監督　（二〇一九年八月三十日）
[第三回]トラブル多発だった映画祭ゲストと宿泊宿が共に成長
＋ 懐かしアルバム　フレデリック・ワイズマン監督　（二〇一九年九月十四日）
[第四回]表現の自由と闘い続ける映画祭
＋ 懐かしアルバム　クシシュトフ・キエシロフスキー監督、楊徳昌（エドワード・ヤン）監督　（二〇一九年九月二十四日）
[第五回]アジアにドキュメンタリー映画が生まれにくいワケ
＋ 懐かしアルバム　田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督　（二〇一九年九月二十八日）
[第六回]映画祭の夜の社交場・香味庵クラブ
＋ 懐かしアルバム　アッバス・キアロスタミ監督　（二〇一九年十月二日）
[第七回]東日本大震災後を追い続ける映像作家たち
＋ 懐かしアルバム　濱口竜介監督　（二〇一九年十月十一日）
[第八回]中学生約三〇〇人が映画で世界の苦悩を知る…内戦後のボスニア描く『約束の地で』を鑑賞
＋ 懐かしアルバム　映画評論家・蓮實重彦、アピチャッポン・ウィーラセタクン監督、ペドロ・コスタ監督　（二〇一九年十二月三十日）

山形国際ドキュメンタリー映画祭30年の軌跡
取材・文　中山治美
編　　集　シネマトゥデイ　www.cinematoday.jp
発 行 日　2020年2月29日
発　　行　認定NPO法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭　www.yidff.jp

YAMAGATA
International Documentary
Film Festival '89